
プロフェットの悪夢

はねとふゆこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プロフェットの悪夢

【Nコード】

N4957N

【作者名】

はねとふゆこ

【あらすじ】

血まみれの少女がそこに立っていた。

一話

こんな所になにがあるというのだろうか。

雑木林に囲まれた寂れた神社。

辺りは黒い絵の具をもっと深く暗くしたような闇に埋もれていて、伸ばした手の先すら見えない。街灯の一本も立っていないのだから、当たり前前の事なのだけど、それでも僕は恐怖心を感じ無い訳には行かなかった。

幽霊とかそういう観念的な存在を信じているか、と問われたらどちらかといえばプラズマ云々の説を推す僕だけれども、こんな環境だったら何が出てもおかしくはない様な気がして、足を竦ませた。こんな所に長い間いたら精神面から侵されてしまいそうな気がする。早いところ、用を済ませて帰ってしまおう。

僕は中断していた作業を再開して、賽銭箱の裏だとか、社の陰だとかを大まかに散策した。

「なにもないか」

それでもしばらくのあいだ、当てもなくそんな作業をしていると、「ん…」目の端に写った光景に違和感を覚える。僕は足を震わせながらもそつちに歩み寄る。

携帯を取り出してその場所を照らしてみると、確かに境内の端の植え込みに、人為的な乱れがあった。まるで、だれかが無理やり通った跡みたいに。

僕は植え込みへと足を踏み込む。

恐れはある。だけどそれを差し引いても僕を突き動かす何かがある。それは好奇心なんかじゃない。

嫌な汗が全身を流れた。足の震えは全身に伝播する。

何もなければそれに越したことはない。この先には誰もいない。ただ静寂だけがひっそりと佇んでいて、僕はほっと胸を撫で下ろす。足早に帰宅して、シャワーで泥を洗い流して、心地良い眠りにつく。

のだ。

そんな僕の希望的な妄想は、あっさりと打ち砕かれた。

「あ…」

思わず声が漏れる。驚愕はある。でもこのまま何もない訳がないのだと妙に納得してしまう自分がいた。

誰かが僕に背を向けて立っていた。

携帯の微かな光源では、その人物像をはっきりと確認することはできない。

「だれだ…？」

恐怖心で声が震えてしまったけどそんな事を気にしている余裕はない。今直ぐにでもこの場から逃げ出したい衝動を必死に抑えて地に足をつける。

「こ、こんな所で、なにをしているんだ？」

もう一度、大きく息を吸い直して言葉を吐き出す。

すると闇の中に佇む人影はゆっくりと僕の方を振り返る。

「あ…」

そこには長髪の少女が立っていた。

「だれ…？」

それは今にも消え入りそうな声。僕は息をするのも忘れてしまふ位の緊張で、少女の問いに答えることなんてできない。感覚を制御することができず、携帯を取り落としてしまう。

少女の全身は、濃い闇の中でもはつきりとわかる程の、鮮血に染まっていた。

「け、怪我しているのか？ 待ってる、すぐに救急車を…」と僕は取り落とした携帯を拾おうとして「…っ!？」

僕は見つけてしまう。

彼女の足元に、静かに横たわる、その死体に。

動物かなにかの死体かと思ったけどそれは違う。長い四肢。どす黒い血に染まった布。そし真っ黒な頭髮。あんなシルエットの動物はこの世に一種類しかない。

つまり、人間の死体だ。

僕は彼女に向き直る。

「それは、君の血じゃないな」

こんな非常識な状況に置かれているのに、妙に落ち着いている自分もまた、非常識な感性を持つているのだろうか、と場違いにも考えてしまう。勿論恐怖心はある。有り余る程に。全身は極寒の地にいるみたいに震えている。でも。

彼女は僕を見ている。いや、その瞳に意思は感じられない。彼女は僕と彼女の間にある空間を、まるでそこに見えない壁でもあるみたいに見つめていた。きっと僕の言葉は彼女には届いていないだろう。

「おい、何があつたんだ…」

彼女は答えない。

身動き一つせず、その視線は相変わらず虚空に据えられている。僕はもう一度、冷たい地面に横たわるそれを見た。

「…死んでいるわ」

まるで僕の意味を読み取ったかのように、彼女が初めて口を開く。それは今にも消え入りそうな細かい声。

「だれにも助けられない。そう、運命づけられているの」

彼女は無表情で言った。

「今直ぐ、ここを離れて。真っ直ぐ家に帰って、今見たことを全部忘れて、普段の生活に戻るの。平和に、普遍的な生活を送るの」
いつのまにか、彼女の放心状態は解かれている様に見えた。今の彼女の瞳にだけは、はつきりとした意思が感じられた。

「忘れられるわけない」

「…え？」

「人が一人死んでいるこの状況を、忘れることなんてできないし、放っておくこともできないって言ったんだ」

「どうして…？」

理解の範疇を超えていた。常識のある人間なら、彼女の言う通

りにするという選択肢を迷わず選ぶのかもしれない。

でも僕にはそれはできない。

「僕には僕のやり方がある」

「答えになつてないわ」

「そうだね」

彼女の話し方のトーンは変わらない。そこには感情が伴っていないように思えた。でもそれはきっと間違いなのだろう。

僕は彼女の視線から逃れるように死体に近づくとその片手を取った。

「確かに、死んでる」

「だから、そう言ってるじゃない」

彼女は冷たい口調で言った。

「だったら早くここを離れたほうがいい」

僕たちは端から見たら、間違いなく不審者だ。犯人だと疑われても、言い逃れできる自信がない。

「好きにしたらいいわ」

「君がここで何をしようとしていたのかは知らないけど、君が犯人じゃないんなら大人しくここを離れるのが懸命だと思うよ」

彼女は答えない。

「それじゃあ、僕は失礼するよ」

僕は腰を上げて、改めて彼女を注視する。

目が暗さに慣れた今なら、ある程度彼女の姿を捉えることができた。真っ白なワンピースには、それが元々何色であったのかもわからないほどの血が付着している。

僕は一つ溜息とつくと、着ていた上着を彼女に投げ渡して、踵を返した。

「ちよつと、これ――」

不服そうな彼女の声を背に受けながら、僕は足早にその場を去った。

最後に後ろを振り返ると、僕の上着を羽織って、雑木林に消え

ていく少女の姿が見えた。

翌日、僕は深い眠りから覚めると、仕事や学校に行くときの3倍速で身支度を整えて、昨晚の神社へと足を向けた。

道すがら国家権力に出くわすことを恐れていたけど、拍子抜けな位何事もなく目的地にたどり着いた。この様子だと、死体はまだ発見されていないだろうか。

僕は正規ルートの石段を登ろうとしたけど、途中で思い直して、道なき雑木林を進むことにした。人気はないけど用心に越したことはない。普段、滅多に人間が出入りしない場所だけに、だれかに姿を見られたら簡単に覚えられてしまうだろう。

草木をかき分けながら奥に進んでいく。途中迷いそうになりながらもなんとか昨晚の場所に辿りつく。

「…あれ」

辺りを見渡す。昼と夜ではまるで別の景色だけど、確かにこの場所の筈なのだけど。

「死体が…ない」

なくなっていた。ぽっかり穴があいてしまったように、それは「忽然と」という言葉がぴったりの位きれいさっぱり無くなっていた。

あれだけ夥しい量の血を流していた死体が横たわっていたのに、僅かな血痕すら見当たらない。

本当にこの場所であつてるのか？

僕は昨日自分が通った植え込みの乱れをさがす。それは付近であつさり見つかった。確かにこの場所で間違いないようだ。

「犯人が回収した…？」

真っ先にそのケースを疑った。あの後犯人が現れて、死体をどこかに隠した。この場所ではだれかに見つかってしまう恐れがあったから。あるいは――

「見られていたかもしれない」

昨晚の僕達の動向を、犯人に見られていた可能性。

それは、僕と例の少女の身が、少なからず危険に晒されていることを意味する。

背中に嫌な汗が流れるのを感じた。

僕は咄嗟に辺りを見渡す。

人の気配は感じない。少なくとも今は。じゃあ昨晚はどうだったのだろう。辺りは雑木林だ。隠れてこの場所を伺える場所はいくらでもある。

死体が発見されていなかったら、警察に通報する事も考えていたけど、それどころではなくなってしまった。今すべきことはなんだろうか。

自分の身を守ること？

いや違う。僕よりももっとあの事件の詳細を知っているであろう人物がいる。深く足を踏み込んでしまった人物が。狙われるなら、僕が先じゃない。

その時、ふと僕は記憶の隅で燻っていた事について思い出す。

「携帯……」

昨晚の一悶着の時に取り落とした携帯。僕は拾わないまま、あの場を去った。そして、ここにそれは落ちていなかった。

肝が冷える、とはこういうことを言うのだろうか。

昨晚同様泥だらけになりながら自宅のアパートに帰りつく。結局携帯は見つからなかった。一応警察には届けたけど、一般人が手に入れているとは考えずらいから望み薄だろう。

沈んだ気分でアパートの階段を上がると、廊下の地べたに人が座りこんでいるのが見えた。

昼間から酔いつぶれているのだろうか。いい大人がだらしない。普段なら声を掛けたりする程度の事はするかもしれないけど、

今は他人の事を気にしている余裕なんてない。僕は気づかれない様に足を忍ばせて自分の部屋に近づく。

「あれ、おかしいな……」

座り込んでるのは、僕の部屋の前じゃないか。そいつは、膝の間に頭を埋めるように丸くなっている。僕は見慣れない、その小さい頭を注視する。

艶のある長い黒髪に、白に赤の水玉のワンピース。その上に力ーキ色の地味な上着を着ていて。

「昨晚はどうも」

とおもむろにそいつは頭を上げて、そう言つと、立ち上がって服の埃をパンパンと払う。

「君は……。どうしてここに？」

その少女は、昨晚の血だらけの。

「用心が足りないわね。殺人現場に居合わせたっていうのに」
「あ……」

と、彼女がねずみをつまみ上げるような仕草で持っているのは見覚えのある携帯電話。

「それは、僕の携帯。君が持ってたのか」

「ええ。格好つけて去っていった癖にとんだ間抜けっぷりね」

「う、うるさい」

と僕が携帯を受け取ろうとすると、彼女はその手をひょいと引っ込めた。

「……なんだよ」

「私が、見ず知らずのあなたに親切に携帯届けたりするような人間にみえる？」

と彼女は昨晚同様の無表情で言う。

「タダでは渡せないわね」

「金とるっていうのか？」

「そんな下賤な取引なんて持ちかけないわよ」と彼女は僕の部屋のドアノブを掴んで「もっと健全な取引をしましょう」

「はあ……」

嫌な予感しかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4957n/>

プロフェットの悪夢

2010年10月9日14時23分発行